

君こゝに千年の後のすみどころ

二葉の松の雲かゝるらん

綱紀卿甚だ感じ給ひ詠歌の語を取り、即ち松雲の二字を別號となし給ひ、薨逝の後贈號をば彼の別號に據つて松雲院殿と稱しけり。又綱紀卿八十歳の賀祝の時基庸祝歌を奉りける。椿樹祝年。

老の坂やそちは麓八千とせの

花咲く春に君やこゆらん

又基庸が作詩。

季秋過泉岳寺四十餘土墓

漂波萬里尋來地 草露沉々故淚行

縱使今爲松下骨 功名高秀在扶桑

此の外にも尙その作詩ありといへども、今悉く爰に記載せず。

○新堂形前

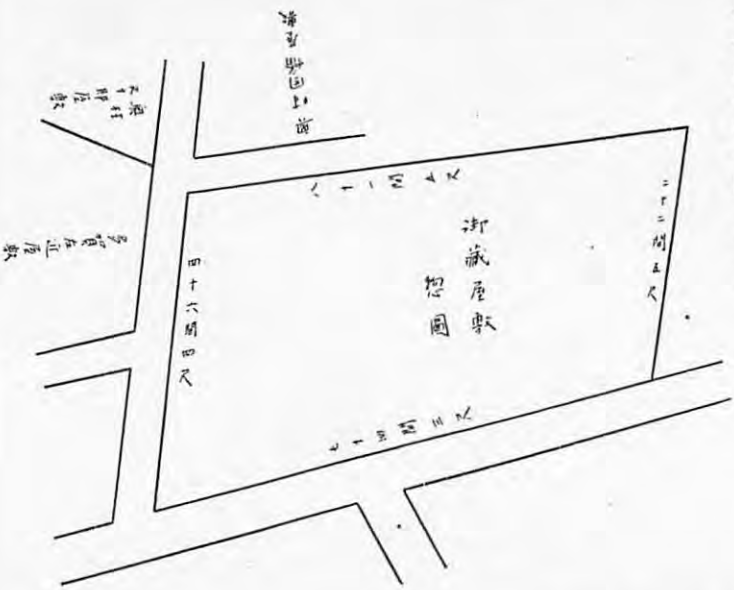
尻谷坂の下より紺屋坂邊をば世俗に新堂形と呼べり。舊藩中は廣坂下邊をば古堂形或は本堂形と稱しけるゆゑに、新堂形と呼びそめたるものなりといへり。按ずるに、高澤

忠順の年代摘要に、兩堂形前道作定掃除、五ヶ年季にて泉談議所之者請負、一ヶ年新堂形四拾目、古堂形九拾目、享保十二年留有之。と載せたり。明治廢藩置縣戶籍編成の際、此の道邊を改稱して尻垂坂通とす。

○新堂形米藏來歴

舊藩中は廣坂下の堂形前と、此なる新堂形とに米藏ありて、共に城米を爰に納め、歩士或は足輕組の人々・小遣小者などの扶持米に渡され、之を堂形下行米と稱し、其の米をば世人堂形藏米と呼べり。堂形の名目は既に廣坂下堂形前の條に載す。彼の堂形をば本堂形、或は古堂形と呼べるにより、尻谷坂下の米藏をば新堂形藏と稱す。元祿六年士帳に、尻谷堂形近所など、載せられたれども、正徳二年の火事定書には、堂形・新堂形と載せたり。されば此の米藏を新堂形と呼べるも輓近の事にあらず。按ずるに、堂形は三十三間堂形の遺稱にて、的場より起りたるを、米倉の名の如く成せしは、利常卿の時本堂形の地なる的場に米倉を建築命ぜられしゆゑ、世人其の米倉をば堂形藏と稱するにより、堂形てふ名は米倉の名の如く心得、後に建築ありし米藏をも

新堂形米藏之圖 旧より



新堂形とは呼びたるなるべし。小松町會所留記に載せたる明曆四年十月の書付に、小松沼町の米藏をも堂形御藏と載せたり。はその頃既に堂形を米藏の名と心得たる事知られけり。さて此の新堂形の米藏は此の地に初め公事場・算用場の兩役場ありしを、利常卿薨後萬治二年に兩役場とも轉地を命ぜられ、跡地は藩士成田彌五兵衛の第地と成りしを、寛文十二年更に藩の用地と成り、米藏を建築命ぜらる。是今云ふ新堂形也と、菅家見聞集・自他群書等にいへり。三州志來因概覽附録には、此の地に初め公事場・算用場ありしを、萬治二年に夫々轉地し、其の跡一旦空地となるを、寛文十二年に最前算用場ありし舊地をば成田彌五兵衛へ賜はり、家作にかゝる處、再び彦三町へ轉地せしめ、其の跡に米倉を建てらるといへり。平次按ずるに、寛文元年日帳に、十一月六日古公事場屋敷廻り之堀出來之由案内、入用目録西脇彌右衛門・不破四郎三郎罷出上る。といふ事見ゆ。されば公事場轉地後は古公事場と呼びたりしを、寛文十二年に米倉を更に建築命ぜられ、夫れより凡そ二百五年間此の地に米倉ありしを、廢藩置縣の後明治九年米倉を毀ち、